

朱鷺黄金伝説

橘 左京 作

鳥追いだ 鳥追いだ だんなシヨの鳥追いだ
どこからどこまで追っていった

信濃の国から佐渡が島まで追っていった
何でも追って追っていった

柴の棒で追っていった

いっちにつくい鳥は ドウとサンギと小雀

みんな立ちあがれ ホーイ ホーイ

あの鳥ヤどつから追ってきた

信濃の国から追ってきた

何も追って追ってきた

柴抜いて追ってきた

一番鳥も二番鳥も飛立（たち）やがれ ホーイ ホーイ

ホンヤラ ホンヤラ ホーイ ホーイ

（鳥追い歌）

この地域では小正月にあたる一月十四日の夜から十五日の早朝にかけて鳥追い行事が行われる。町内ごとにホンヤラドウとよばれる、お椀をひっくり返したような形の雪の家がつくられる。

十四日の夜に子どもたちはホンヤラドウのなかに持ち込まれたストープやこたつで暖をとり、こちそうを食べながら夜更けまで遊ぶ。頃合いをみて外に出た子供たちは隊列を組んだ後、拍子木（ひょうしぎ）を打ち鳴らしながら鳥追い歌を歌って町内を回る。

鳥追い歌は農作物を食べ荒らす害鳥を畑や田んぼから追い払って豊作になるようにと願って歌われる。昔は畑や田んぼでとれる作物の量が今よりも少なかったので、鳥に作物を食べられるというのは農家にとっては大きな心配ごとだった。

昔に比べて鳥追い歌はあまり歌われなくなったが、ホンヤラドウの遊びだけは今でも子どもたちの冬の楽しみとして残っている。

平成二十年九月二十五日。新潟県の佐渡島にある朱鷺保護センター近くの水田から十羽の朱鷺が放鳥された。小学三年生の雄太は夕方、妹の弥生とテレビのニュースを見ていた。アナウンサーが朱鷺の放鳥を伝えた。

「朱鷺にとって野生の第一歩が始まりました。今日、国の特別天然記念物朱鷺の試験放鳥が佐渡島で行われました。中国産のつがいを使って人工繁殖されたオス、メス五羽ずつの十羽が放鳥されました。乱獲と開発で絶滅した朱鷺が野生に戻るのは二十七年ぶりです。十年前時半過ぎ、朱鷺保護センター近くの水田に設けられた式典会場で、臨席した秋篠宮ご夫妻はじめ、島内で朱鷺の保護活動に携わった人たちや地元小学生らがテープを切ると、十個の木箱のふたが開いて最初に二羽がその後八羽が空へと飛び立っていきましました。十羽の朱鷺は、たくさんの人たちの歓声に包まれながら優雅に空を舞った後、思い思いの場所に飛んでいきましました。放鳥された十羽には標識となる足輪がつけられています。今後、専門家による調査・追跡チームが放鳥された朱鷺の行動を調べることになっていきます」

雄太は、太陽の光を受けて薄桃色になった翼を羽ばたかせて飛んでいく朱鷺の姿を食い入るように見ていた。

「いただきます」雄太の家では、家族で夕ご飯の食卓を囲んでいた。「お父さん、今日ね、佐渡島で十羽の朱鷺が外に放されたって、夕方のニュースに出ていたよ」

雄太は仕事から帰って来た父に向かって言った。

「そうだね。お父さんも職場のテレビで、朱鷺が放鳥されたニュースを見ていたよ」

雄太の父は動物園に勤めている。

「お父さん、放鳥された十羽は中国産の朱鷺を繁殖させて増やした朱鷺だってニュースで言ってたけど、どういう意味？」

「朱鷺の学名はニッポニア・ニッポンと言うんだけど、昔は日本の東北地方や日本海側に生息していたごくありふれた野鳥だったんだ」

「お父さんは野生の朱鷺を見たことがあるの？」

「お父さんは見たことがないけれど、お父さんのお爺さん、雄太のひいじじが子供の頃には田んぼや小川で朱鷺が普通に見られたそうだよ」

「ひいじじが田んぼや川にいる朱鷺の姿を見たのは随分と昔のことでしょう？」

「そうだね、百年くらい前の明治から大正時代の頃だね」

父の話は続いた。

「昔は日本の各地に生息していた朱鷺だけれども、乱獲や開発によって数が減ってしまったんだ。昭和五十八年に佐渡島に残っていた最後の日本産の朱鷺五羽が捕獲されて人工繁殖で増やそうとしたけれどももううまくいかなかったんだ。平成十五年には最後に残ったメス

の『キン』が死んで日本産の朱鷺は絶滅してしまっただ」
「テレビでは、放鳥された十羽は中国産のつがいから生まれた朱鷺だっって言っていたよ」
「そうだよ。日本産の朱鷺が絶滅したので、平成十一年に中国から贈られた朱鷺のつがいを使って人工繁殖させることにしたんだ。朱鷺保護センターで飼育している朱鷺が増えてきたことから、朱鷺が野生でも生きていけるようにと訓練した十羽を、今日、初めて自然界に放したんだよ」

「昔の日本に普通に見られた朱鷺がどうして、今はいなくなったの？」

「朱鷺が日本から絶滅した理由は二つあるよ。一つは朱鷺の食べ物が少なくなったことだ。朱鷺は水辺や湿地を生活の場所に行っている。朱鷺の食べ物はドジョウ、サワガニ、カエル、タニシ、昆虫などで、もっぱら動物性の餌を食べているんだ。昔は、田んぼに朱鷺の餌になる生き物がたくさん生息していたけれども、その田んぼが住宅団地や工業団地として開発されたため、餌場が急速に減ってしまったんだ。僕たち家族が住んでいるこの住宅団地も昔は田んぼだったんだ」

「ええ！ここが田んぼだったの？」

「朱鷺がいなくなったのは、田んぼが開発されて餌場がなくなっただけじゃないよ。農家の人が稲の成長を妨げる雑草や害虫を駆除するために、農薬を使うようになってからは、朱鷺が食べる小動物が田んぼから姿を消してしまっただよ」

「来週、稲刈りをする学校の田んぼにはイナゴがたくさん飛んでいるよ。それに五月に田植えをした時はドジョウやタニシをいっぱい見つけたよ」

「農薬をほとんど使わない学校の田んぼには、小さな動物が生き続けている環境が、まだ残っているからさ。最近になって、これまで使っていた農薬が人間の健康や環境に悪い影響を与えることが分かってきたので、農薬の使用が厳しく制限されるようになってきたんだ。そのため、農薬がまだ田んぼで使われていなかった頃にいた小動物が、少しずつ見られるようになったんだよ。佐渡島では野生の朱鷺が安心して餌を捕れる環境を作ろうと、農家の人たちが田んぼで農薬を使わない取り決めをしたそうだよ」

父の話はまだまだ続いた。

「雄太は鳥追い歌って知ってるかい？」

「知っているよ。小正月の前日、一月十四日に行われる鳥追いの時に、子供たちが歌う歌でしょう。豊作になるようにと田んぼで悪さ

をする鳥を追い払うための歌だつて、学校の先生が教えてくれたよ。それに鳥追いが今でも行われている地域から通っている友達もいるよ」

「そうだね。昔は朱鷺や鷺、それに雀は農家にとつては悪い鳥だったんだ。朱鷺や鷺は田んぼにいる水生動物を捕る時に、植えたばかりの若い稲の苗を踏み荒らすんだ。時には柔らかい苗を食べることもあったんだ。稲刈りが始まると、今度は雀の大群が田んぼにやってくる。稲穂に付いた籾を採って食べてしまふんだ。毎年、小正月に行われる鳥追いは、農家の人たちが稲の生育を妨げる朱鷺や鷺、稲穂を食べ散らかす雀を田んぼから追い払って、豊作になるようにと願って行われる行事だったんだ」

「農家にとつては悪い鳥の鷺や雀は今でも田んぼにいるよ。どうして朱鷺だけが田んぼからいなくなったの？」

「さつき、お父さんが日本から朱鷺がいなくなった理由が二つあるつて言つただろう。一つは田んぼの開発と農薬の使用だ。もう一つは乱獲だよ。昔は装飾用や食用として朱鷺が捕獲されていたんだ。朱鷺の羽の色は全体で見ると白だけど、翼を広げた時に見える風切羽や尾羽は薄桃色になっている」

雄太は朱鷺色になった翼を羽ばたかせて空を舞っている十羽の朱鷺の姿を思い出した。

「お父さん、今日放鳥された朱鷺の翼も薄桃色だったよ」

「そうだね。太陽の光を受けて薄桃色になった翼を広げて飛んで行ったね。この色は朱鷺色と呼ばれ、羽は装飾品を作る時に使われたそうさ。また、肉は薬膳料理として使われていたそうさ」

雄太はその夜、夢のなかで不思議な体験をした。雄太の体が九十年前の大正時代にタイムスリップしたのだ。時は大正八年一月十四日の夜。雄太はお椀をひっくり返したような形をした雪の家にいた。ホンヤラドウド。床には何枚もむしろが敷かれ中央には火鉢が置かれている。

ホンヤラドウドのなかには五、六人の子供たちが火鉢を囲んで暖を取っている。火鉢に敷かれた金網には狐色に焼けた餅が並んでいる。子供たちは大きな声で鳥追い歌の練習をしている。

鳥追いだ 鳥追いだ だんなシヨの鳥追いだ

どこからどこまで追つていった

信濃の国から佐渡が島まで追つていった

何でもつて追つていった

柴の棒で追つていった

いっちにつくい鳥は　ドウとサンギと小雀

みんな立ちあがれ　ホーイ　ホーイ

あの鳥ヤどっから追ってきた

信濃の国から追ってきた

何もって追ってきた

柴抜いて追ってきた

一番鳥も二番鳥も飛立（たち）やがれ　ホーイ　ホーイ

ホンヤラ　ホンヤラ　ホーイ　ホーイ

「雄太君、甘酒よ。体が温まるわよ」

赤い半纏を着た雪絵が甘酒の入った湯呑を雄太に渡した。

「ありがとう、雪絵ちゃん。いただきます」

湯呑を両手で受け取った雄太は冷たくなつた手を温めた後、湯呑を口に付けて甘酒を飲み始めた。

「温かい！甘くて美味しいね」

「雄太君、餅が焼けたわよ。まだ熱いから気をつけて食べてね」

雪絵がこんがり狐色に焼けた餅を皿に入れて雄太に渡した。餅から出た香ばしい匂いに雄太の鼻がひくひくと動いた。

「いい匂いがするよ。雪絵ちゃん、ありがとう」

しばらくして、リーダー格の太郎が子供たちに向かって言った。

「体も温まったし、これから鳥追いに出掛けるけど、みんな準備はいいかい？」

「いいよ！」

子供たちはわらを編んで作った蓑を頭から被って外に出た。外は小雪がちらついている。あちこちのホンヤラドウから、蓑を身にまとつた子供たちが広場に集まってきた。広場の中央にはさいの神が建っている。

さいの神は、地面に立てた竹の回りに杉の葉っぱや豆殻などを押し込んだ後、周りを稲わらで囲った円錐形の塔だ。このさいの神は明日の夕方に火入れが行われる。

広場に集まった子供たちは拍子木を持って隊列を組んだ。何人かの子供たちは火を付けた松明を持っている。いよいよ鳥追いの出発だ。カチ、カチ、カチ。拍子木を打ち鳴らす音に続いて、鳥追いの歌が始まった。

鳥追いだ　鳥追いだ　だんなシヨの鳥追いだ

どこからどこまで追っていった

信濃の国から佐渡が島まで追っていった

何でもって追っていった

柴の棒で追っていった

いっちにつくい鳥は ドウとサンギと小雀

みんな立ちあがれ ホーイ ホーイ

あの鳥ヤどっから追ってきた

信濃の国から追ってきた

何もって追ってきた

柴抜いて追ってきた

一番鳥も二番鳥も飛立（たち）やがれ ホーイ ホーイ

ホンヤラ ホンヤラ ホーイ ホーイ

一月十五日の夕刻、薄暗くなった広場では大勢の村人たちがさいの神を取り囲んでいる。さいの神に火が付けられた。白い煙がモクモクと稲わらの隙間から出てきて、周りにいた村人たちを包み込んだ。ゲホ、ゲホ、ゲホと、白い煙を吸い込んで咳き込む者や、白い煙が目に見えて涙を流す者がいた。

しばらくすると白い煙が無くなって、今度は赤い炎が吹き出した。幾つもの小さな炎が集まって火柱となり天空を突き刺した。村人たちは、勢いが衰えた炎に丸い団子やスルメを付けた柴木をかざした。鳥追いもさいの神も、村人にとっては豊作を祈願する大事な年中行事だ。

四月中旬。雪が消えた田んぼでは田植えの準備が始まった。村人に引かれた農耕馬が、雪の重みで硬くなった田んぼを耕している。岸辺に打ち寄せるさざなみ波のように耕された隣の田んぼでは、村人が手すきを使って細かく土を砕いている。

五月下旬。水が引かれてドロドロになった田んぼで田植えが始まった。田んぼに植えられた若い苗が太陽の光を受けて少しずつ伸びてきた。田んぼの茶色が徐々に緑色に変わってきた。

近くの里山から数羽の朱鷺が平地に広がる田んぼにやってきた。水が張られた田んぼにはドジョウ、おたまじゃくし、カエル、タニシなど、朱鷺の食べ物がたくさんある。

「あ、朱鷺が田んぼに降りたぞ！」

ドン、ドン、ドン。バン、バン、バン。

植えたばかりの苗を踏み荒らされてはたまらないと、村人たちは手に持った柴の棒で鍋底を叩いて朱鷺を山へと追い払おうとした。鍋底を叩く音に驚いた朱鷺は田んぼを飛び立っていったが、少し離れた所にある田んぼに降りて、また食べ物を探し始めた。

「鍋の音で脅かしても効き目はなさそうだ。わしの鉄砲の音で朱鷺を蹴散らしてやろう」

ドーン、ドーン、ドーン。

猟銃を持った男が空砲を三発、空に向けて放った。田んぼにいた朱鷺が一斉に飛び立った。今度は近くの神社の境内に茂る杉林の方に飛んでいった。

田植えが終わったこの時期は朱鷺の子育ての時期と重なる。里山の樹の上に作られた朱鷺の巣には四月に生まれたばかりの雛が腹を空かせて親鳥の帰りを待っている。雛の食欲は旺盛だ。腹を空かせて待っている雛に食べ物を運んでいかなければならない親鳥は、田んぼと巣の間を忙しく行き来している。

一時間ほどが経って、ひとつがいの朱鷺が神社近くの田んぼに降りて食べ物を探し始めた。その田んぼは先ほど猟銃で空砲を放った男の田んぼだった。それを見た男は怒った声で言った。

「わしの田んぼで悪さをすると、につくき朱鷺め。鉄砲で撃ち殺してやる！」

男は実弾を込めた猟銃の銃口を朱鷺のつがいに向けた。

ドーン、ドーン、ドーン。

銃声に驚いて飛び立った二羽の朱鷺の体に銃弾が命中して、二羽は田んぼに落ちていった。

男は田んぼに落ちた二羽の朱鷺を手を取って言った。

「ざまあみろ。わしの田んぼで悪さをすると、こういうことになるんだ。肉は鍋に入れて食べるとするか。羽はむしり取って町の機織屋に持って行くか。高価な朱鷺色の羽は高く売れるだろう」

ピー、ピー、ピー。

「お父さん、鳥の鳴き声がするよ」

里山で柴刈りを手伝っていた雄太が父に言った。二人は樹の枝に掛けられた朱鷺の巣を見つけた。灰色の産毛に覆われた三羽の雛が、巣の中で寄り添って鳴いていた。

「どうしたんだろう。もう親鳥が巣に戻っている時間なのだが……」
父が呟いた。

太陽が傾いて日陰になった山の斜面は薄暗く、周囲の空気が冷たく感じられる。

ガー、ガー、ガー。ガー、ガー、ガー。

二羽のカラスが巣の近くの樹に止まっている。どうやら雛を狙っているようだ。

ピー、ピー、ピー。ピー、ピー、ピー。

雛の鳴く声が山の斜面に木霊する。雛は恐怖と寒さで震えているようだ。

「このままではカラスに食われてしまう」

父は樹に登って、巢から三羽の雛をそつと取り出して麻袋に入れた。

「雄太、暗くなる前に家に帰るぞ」
父は雛を入れた麻袋を雄太に渡した。

ピー、ピー、ピー。

雄太の持った麻袋の中から雛の鳴き声が聞こえてくる。

雄太の家は里山の麓にある。家に帰った雄太と父は、雑魚を鍋に入れて煮詰めて柔らかくした。冷えて固まった煮凝りを、山で刈り取ってきた柴木の先に付けて雛の口元に持っていたが、朱鷺の雛は人間を警戒しているのか、なかなか食べようとしない。

二日目からは少しずつ食べるようになった。雛は成長し、だんだんと体が大きくなってきた。雄太と父は納屋の一角に金網で囲った大きな鳥小屋を作った。雄太と父が育てた雛は親鳥と同じくらい大きくなった。止まり木の三羽の朱鷺は、時折、翼を羽ばたかせている。もうすぐ巣立ちを迎える。

六月中旬。鳥小屋の扉が開かれて朱鷺が外に放たれた。三羽の朱鷺は雄太の家の周りを何回も巡回した後、里山に向かって飛んで行った。

里山近くにある雄太の家の田んぼは今年も稲の生育がよくない。植えたばかりの若い苗を鳥が踏み荒らすからだ。雄太の父は田んぼで悪さをする鳥が、朱鷺ではなくてゴイサギであることを知っていた。

ゴイサギは、サギと違って夜行性の鳥だ。昼間は薄暗い森に住み、夕方になると水田や小川に飛んできて、魚、カエル、ザリガニなどを捕って食べる。

夜空をクワツ、クワツと鳴きながら飛んで行くことから夜ガラスという名前が付けられている。普通のサギよりも体の大きいゴイサギの悪行が朱鷺の仕業になってしまったのだ。

七月のある満月の夜。雄太と父は水回りをするために田んぼに出掛けた。

ケロ、ケロ、ケロ。

水が張られた田んぼからカエルの鳴き声が聞こえてくる。二人が田んぼに到着すると三羽の鳥がいた。

「またゴイサギが飛んで来て田んぼで悪さをしているようだ」

父が言った。

「お父さん違うよ。朱鷺だよ」

父は月明かりのなかで目を凝らして鳥を見た。

「本当だ。雄太の言うとおり、あの三羽の鳥は朱鷺だね。脚に輪つ

かが付いている。もしかすると山のなかで保護したあの朱鷺の雛かもしれない」

二人は山の中で保護して育てた朱鷺の雛が大きくなって放鳥する時に、足環をつけたことを思い出した。

三羽の朱鷺はゴイサギで荒らされた田んぼで田植えをしていた。ほどよく成長した黄緑色の苗をくちばしにくわえて、丁寧に植えている。月明かりなか、二人は三羽の朱鷺が田植えをしている不思議な光景をしばらく見ていた。

九月中旬。ザク、ザク、ザク。山の麓の田んぼでは稲刈りが始まった。村人たちは、黄金色になった稲穂を鎌で刈り取っていた。

神社近くの田んぼでも稲刈りが始まった。植えたばかりの苗を踏み荒らされた腹いせに、朱鷺を猟銃で撃ち殺した男の田んぼだ。たわわに実って頭を垂れた黄金色の稲穂を見ながら男は満足そうにつぶやいた。

「稲穂に付いた籾も大粒だし籾の数も多い。今年はいつもの年よりもたくさんのお米が採れそうだ。それに案山子のおかげで雀も寄ってこない」

しかし気になることがあった。案山子が立てられた隣家の田んぼでは、雀が群がって稲穂を突っついていて

「おかしいな。どうして、わしの田んぼにだけ雀が寄り付かないのだろうか？」男は不思議に思った。

男は刈り取った稲穂を千歯扱（せんばこき）で脱穀して出てきた籾米を籾摺り機に通した。籾殻が取り除かれて出てきたのは、茶色い粒だった。

「あ、あ、どうしたんだ！」男はびっくりして、茶色い粒を手に取って調べたら、それは砂粒だった。男の田んぼで採れた籾のなかに入っていたのは黄色い米粒ではなくて、茶色い砂粒だった。

雀は男の田んぼの稲穂に砂粒が入っていることを知っていた。雀は砂粒の入っている男の田んぼを避けて、米粒の入っている隣家の田んぼの稲穂に集まったのだ。

「もしかして朱鷺のたたりかもしれない。わしが朱鷺を鉄砲で撃ち殺したからだ」男はがっくりと肩を落とした。

ザク、ザク、ザク。雄太は父と黄金色になった稲穂を鎌で刈り取っていた。里山の麓にある雄太の家の田んぼでも稲刈りが始まった。しかし、田んぼに雀の姿はない。

「稲穂に付いた籾も小粒だし籾の数も少ない。それに雀も寄ってこない。今年はいつもの年よりも米が採れないかもしれない」

父は刈り取った稲穂を手に持って言った。刈り取った稲穂は束ね

られ稲架（はさ）に掛けられた。夕日を受けた稲穂は黄金のような輝きを放っていた。稲架に掛けられた稲穂は夜になっても輝き続けていた。しかし雄太も父もこのことを知らない。

雄太と父は稲穂を千歯扱（せんばこき）で脱穀して出てきた粃米を粃摺り機に通した。なんと、粃殻が取り除かれて出てきたのは、黄色い米粒ではなく金色の粒だった。

「あ、あ、どうしたんだ！」雄太君と父はびっくりした。金色の粒を手に取って調べたら、それは砂金だった。粃のなかに入っていたのは米粒ではなくて砂金だった。雀は稲穂に砂金が入っていることを知っていた。雀が雄太の家の田んぼに寄って来なかったのは、好物の米粒が稲穂に入っていないことを知っていたからだ。父はつぶやいた。

「不思議なことがあるもんだ。あの夜、三羽の朱鷺が田んぼで植えていた黄緑色の苗は黄金を生む稲穂の苗だったのだろうか？もしかして、あの三羽の朱鷺の親鳥は佐渡島から飛んできたのかしれない」

江戸時代初期に最盛期を迎えた佐渡金山は、当時としては世界最大級の金山だった。佐渡金山は江戸幕府の直轄地として管理され、幕府の財政を支えた。明治、大正の時代になっても佐渡金山では金や銀の採掘が行われていた。

「雄太、まだ寝ているの。朝ご飯よ」

一階から母の声がした。朝ご飯を食べ終えた雄太は小学校に向かった。今日は雄太が通う小学校で稲刈りが行われる。

「稲穂の根元をしっかりと手でつかんだら、鎌の刃先をあててください。鎌で手を切らないように手元をよく見て切ってください。一束ずつ慌てずにゆっくりと刈り取ってください」

近くに住む農家のアトバイスを受けながら、子供たちは稲刈りをしている。

ザク、ザク、ザク。雄太は慣れない手つきで稲を刈っている。農薬を使わずに稲を育てた学校の田んぼにはたくさんの小動物がいる。イナゴが稲穂の上を飛び回っている。稲を刈り取った後に露出した地面をカエルが跳び撥ねている。

十一月に入った。雄太は二階の教室から窓の外をぼんやり眺めていた。遠くに見える高い山では山頂付近が白くなっている。来月に入ると平野部にも雪が降り始める。学校の田んぼには越冬のためシベリアから渡って来た数羽の白鳥が落ち穂を拾って食べている。白鳥の群れから少し離れた場所に、白鳥よりも小柄な白い鳥を見つけた。顔が赤くなっている。弓なりに曲がった長くて黒いくちばしで

柔らかくなつた田んぼの土を突つついていゝる。朱鷺だ。

「先生、あそこに朱鷺がいるよ！」

雄太は指を外に向けながら、大声で先生を呼んだ。

「ええ、ほんと！」

教室にいる子供たちが一斉に窓の外を見渡した。双眼鏡を持つてきた先生がレンズを覗き込むと、確かに小柄な白い鳥は朱鷺だった。

「雄太君の言うとおり、学校の田んぼに朱鷺がいます。九月に佐渡で放鳥された朱鷺が海を越えてここまで飛んで来たようですよ！」

先生は教室の子供たちに伝えた。教室がざわめいた。先生は学校の田んぼに朱鷺が飛んできたことを朱鷺保護センターと雄太の父が勤めている動物園に連絡した。早速、動物園の車が学校の田んぼにやってきました。車から降りた雄太の父が朱鷺の写真を何枚も撮って帰っていた。

雄太は家に帰ると、母と妹に学校の田んぼに朱鷺が飛んできたことを話した。

「お母さん、学校の田んぼに朱鷺がいたよ。テレビ局の人が大勢やってきてカメラを向けていたよ。それにお父さんも来て写真を撮っていたよ」

「ええ！学校の田んぼに朱鷺がいたの？九月に佐渡島で放鳥された朱鷺かしら？」母が言った。

「お兄ちゃん、私も朱鷺を見たかつたわ」弥生が悔しそうに言った。

夕方、雄太と弥生がテレビのニュースを見ていたら、学校の田んぼでエサを捕る朱鷺の姿が映し出された。アナウンサーは、九月に佐渡島で放鳥された十羽の朱鷺のうちメスの一羽が佐渡海峡を越えて本州に飛来したことを伝えた。

「お兄ちゃんが学校で見た朱鷺が映っているよ！長いくちばしで土をほじくって餌を探しているわ。写真を撮っている人って、もしかしてお父さん？」

「そうだよ。お父さんが帰ってきたら朱鷺について教えてもらおうよ」

「うん」

「いただきます」雄太の家では夕ご飯の食卓を囲んでいた。

雄太はご飯を食べながら仕事から帰って来た父に尋ねた。

「お父さん、どうして朱鷺は佐渡島から海を越えてここまで渡って来られたの？」

「あの朱鷺は季節風に乗って佐渡から本州まで飛んで来たんだよ。冬になるとロシアから日本に向けて北西の季節風が吹いてくるので、風に乗れば案外と簡単に海を越えることができるんだ。田んぼにい

る朱鷺が普通に見られた昔は佐渡と本州の間を行き来していたらしいよ」

「本州に渡って来た朱鷺はこっちで生活できるの？田んぼにドジョウやカエルなど、朱鷺のエサになる食べ物がたくさんいないと生きていけないよ」

「雄太はコウノトリという鳥を知っているかい？」

「実物は見たことがないけど、写真では見たことがあるよ」

「私も知っているわ。赤ちゃんを運んでくる鳥でしょう？」

「弥生、それは物語のなかでの話だよ。兵庫県の豊岡市では絶滅したコウノトリを復活させようと、ロシアのハバロフスク市から六羽のコウノトリを譲り受けて人口繁殖させたんだ。平成十七年九月に五羽が野外に放鳥されて、今では八十羽近くのコウノトリが豊岡盆地に生息しているそうさ。豊岡市の農家は農薬を全く使わないか、ほとんど使わない、そして化学肥料も一切使わないで稲作をしているそうだよ。また、コウノトリのエサになるカエルやドジョウなどの生き物を増やすために、稲刈りが終わった後も、田んぼに水を張っているそうさ。一度は絶滅して日本からいなくなった朱鷺もコウノトリも、野生復帰させるには農家や地域の人の協力が欠かせないんだ」

雄太の学校の田んぼに朱鷺が飛来したことがきっかけとなって、雄太の小学校では朱鷺保護センター近くにある佐渡の小学校と交流することになった。この小学校の児童たちは朱鷺の生態をはじめ、絶滅の歴史、放鳥の取組み、野生での生活について学んでいる。児童たちは教室と現地での学習から学んだ知識をもとにして朱鷺の森公園を訪れた修学旅行生のガイドをしている。

雄太の父は、佐渡から飛んできた朱鷺が安心してこの地域に生活できる環境を作っていくことが安全な米作りにもなると考えて、農薬を使わない、できるだけ使わない稲作をしようと農家の人や地域の人に呼び掛けた。雄太の父の考えに賛同する人たちが少しずつ増えてきた。(了)